

[投稿]

# ASCE ボストン大会に出席して

川島一彦

Kazuhiko KAWASHIMA

フェロー会員 国際委員会幹事長 工博 東京工業大学教授 工学部土木工学科

## ASCE ボストン大会

土木学会とASCE（米国土木学会）は1988年に相互協力協定を締結し、緊密な関係を保ってきた。ASCEでは毎年10月頃にConventionと呼ばれる大会を開催し、新旧会長の交代や名誉会員の推挙、学会賞の授与等のセレモニアルな儀式と同時に、技術発表会を行っている。技術発表会といっても土木学会の全国大会のように個人発表ではなく、ASCEを構成する各種研究委員会等がモデレータを定め、モデレータが1セッションにつき4、5名の発表者を招聘して発表を行う形式となっている。したがって、土木学会でいえば技術発表会は全国大会の際の研究討論会のような性格（セッションの数はもっと多い）で、これに毎年5月に開催される総会をもっと大規模にして両者を同時に行うのが、ASCEの大会である。毎年主要都市を回って開催されており、1998年の大会は10月18～22日にボストンのシェラトンホテルと周辺のコンベンションセンターで開催された。

土木学会ではASCEとの協力関係を深めるために、1992年頃から継続的にASCE大会に会長を派遣し、国際活動の大きな柱としてきた。今年度は岡田宏会長のほか、国際委員会から石井弓夫委員長、花村哲也副委員長、富永真生小委員長、三好専務理事、それに筆者が派遣された。また、後述する明石海峡大橋の特別セッションに出席していただくため、佐伯彰一氏（本州四国連絡橋公団顧問）、藤野陽三氏（東京大学大学院教授）、古

屋信明氏（本州四国連絡橋公団）、藤田時男氏（鹿島建設）にも参加をお願いした。

以下、ASCE ボストン大会のハイライトを紹介する。

## 趣向を凝らした盛りだくさんなボストン大会

土木学会の総会や全国大会を想定して会場に着くと、土木学会とはまったく異なることがわかる。会場はボストン市内の中心部を占めるホテル群とコンベンションセンターからなる一角にあり、非常に大規模である。一般の市民が多数往来する屋内回廊のまわりに会場が設定されており、建設産業の重要性を広く市民にアピールできるようになっている。会議の中身も盛りだくさんで、技術発表会というよりも上品な社交の場といった趣である。婦人用プログラムも用意されており、家族で楽しみながら参加することもできる。事実、多数の会員が家族連れで参加していた。

とてもすべてのセッションに参加することはできないため、日本側メンバーは手分けして、国際フォーラム、国際協定学会メンバーに対する歓迎レセプション、国際セッション、土木技術研究基金(CERF)主催の朝食会、協定学会との協定延長のサイン式、建設企業トップの講演会、国際ラウンドテーブル会議、総会等に参加した。

## 新旧会長の交代

総会では、Graef会長からTurner新会長への交代が行われた。ASCEでは会長の任期は1年であり、毎年9月に次次期の会長が選挙で選出され、10月の総会で会長が退任し、次期会長が会長に、次次期会長が次期会長となる。

会長交代に先立ち、Davis専務理事がASCEの現状報告を行った。ASCEは財政状態も健全で、会員数も増え着実に前進していることを強調するとともに、建設産業の競争力強化にASCEが貢献していることを強調した。スピーチの最後の方では退任するGraef会長の指導力と貢献をたたえ、会場の参加者全員が立ち上がって大きな拍手を送った。Graef会長も目を潤ませながら会員の感謝に答えるなど、日本の土木学会総会とは異なった趣である。



写真 - 1 Turner新会長の就任演説

その後、Turner 新会長（アラバマ大学教授）の紹介がまずビデオを通して流れ、大学での講義風景、考え、ASCE 新会長としての抱負などが紹介された。ビデオの前半では、建国の父ジョージ・ワシントンが土木技術者でかつ測量士であったことを紹介し、吊橋の建設に大きな足跡を残したローブリッジ等、土木技術者の偉大さと社会に対する貢献の大きさを示した。日本式の“理解を得る”という弱々しいものではなく、みている者を圧倒させる内容で、土木技術者であることに大きな誇りと自信を与えるように構成されていた。

次いで、Turner 新会長の就任スピーチが約20分にあたって行われた(写真 - 1)。この中では「新しい時代に答えるために、われわれは変化しなければならない」を何回もキーワードとして繰り返す、「グローバルエコノミー」、「地球は小さくなりつつある」といった表現で、新しい地球規模の大きな変革に立ち向かい、ASCE 会員が大きく変わっていくことの重要性を強調した。また、「創造」、「情熱」の重要性も指摘し、さらに、何かを始めるときに「過去の例は重要ではない。重要なことは考えることだ」という表現で、新しい時代に新しい考えで臨むことの必要性を示した。「ジョージ・ワシントンを継ぐのは誰か？ ローブリッジを継ぐのは誰か？」と偉大な時代の継承の重要性を強調して就任演説を締めくくった。

---

#### 明石海峡大橋に関する国際セッション

---

ASCE 大会ではここ数年、土木学会国際委員会が中心となって国際セッションの一つを担当し、日本の土木技術のハイライトを紹介してきた。現在までに、瀬戸大橋、関西新国際空港、東京湾アクアライン等を紹介してきている。今回もこの流れに沿って、わが国の代表的プロジェクトとして、本州四国連絡橋公団の協力を得て明石海峡大橋の特別セッションを設け、世界に誇るわが国の長大橋技術を紹介した(写真 - 2)。

筆者がモデレータを勤め、明石海峡大橋の位置や今後のプロジェクトの概要を紹介した後、佐伯氏（設計、施工の概要）、古屋氏（明石海峡大橋の建設に伴う技術開発）、藤野氏（上部構造および耐風安定性）、藤田氏（下部構造の施工）の4名から発表が行われた。本セッションのために全文112頁の英文報告書を作成し、会場で無料配布した。コンクリートの特性、施工期間、建設費、地盤支持力等に関して活発な質疑応答が行われ、関心の高さが示された。



写真 - 2 明石海峡大橋の国際セッション

---

#### 国際ラウンドテーブル会議

---

ASCE は多数の海外の学会と協力協定を結んでいる。協力学会の代表が一堂に会し、今後の協力のあり方に関する打合せを行うのが国際ラウンドテーブル会議である。今年は日本（土木学会）のほか、香港、ガーナ、ドイツ、フィンランド、コスタリカ、コロンビア、パングラディシュ、オーストラリア、メキシコ、フィリピン、南アフリカ、スウェーデンの代表が集まって、ラウンドテーブル会議を行った。

今回のテーマは“国際的な水資源管理”であり、わが国からは石井氏が出席し、日本はアメリカに比べ一人当りの水資源が数分の1であり、また、降雨の季節的変動が大きく急峻な山地が多いため水はすぐ流出すること、治水、利水、さらには環境に大きな問題を抱えていること、これを解決するためダムなどの構造的手段と同時に、情報ネットワークシステム、土地利用・水利用の合理化、河川事業への住民参加などの非構造的手段もあわせてとっていることなどを報告した。自由討議の中で石井氏は、米国開拓局のBeard元局長が日本にまで来て、ダムは要らないと講演して歩いたことにたいへん迷惑しているとコメントされたが、これに対して米国開拓局代表から、自分たちも迷惑しており、現在開拓局は政策を変更し、立て直しに努力中であるといった発言も飛び出した。

ただ、今年の国際ラウンドテーブル会議は主題があまりにテクニカル過ぎ、各国で実状が著しく異なる中で、各国代表が将来のASCE との協力関係を向上させていくうえで有効なディスカッションができたのかという声も聞かれた。



写真 - 3 アジア土木技術国際会議に関する3学会長の打合せ

## 第2回アジア土木技術国際会議に関する打合せ

アジア土木技術国際会議は、ASCE、フィリピン土木学会、土木学会の主催で、1998年2月19、20日にフィリピンのマニラ市で第1回が成功裡に開催された。第1回会議には土木技術者でもあるラモス大統領も出席し、アジア圏のインフラ整備に関わる広範な内容について技術発表と討議が行われた。第1回会議において、土木学会の宮崎会長（当時）が第2回会議を日本で開催したいとの提案を行い、各国から支持されたことから、現在、土木学会では2001年4月に東京で開催することをめざして、各種の準備を開始している。これに関して基本的な方針をASCE、フィリピン土木学会と打合わせることが、今回のボストン訪問のもっとも重要な課題であった。

打合せには、ASCEからGraef会長、Turner次期会長（現在、会長）等、フィリピンからはCrutzフィリピン土木学会会長ほか、日本側からは岡田会長らが出席して、Graef会長が滞在するホテルの一室で行われた（写真-3）。アジア土木技術国際会議は特定の技術分野に偏らず、いずれの国においても共通する普遍的な土木の課題をアジア圏の国々が議論し合う場であると同時に、各国土木学会のサミットの集まりであり、建設産業の必要性と重要性を広く各国の国民にアピールする機会として非常に重要な使命を持っている。

今回の打合せのポイントは、第2回会議に向けた準備の方針を固めると同時に、今後、アジア土木技術国際会議を安定的かつ継続的に開催していくために、アジア圏の国々の土木学会やASCE等の代表から構成されるアジア土木技術国際会議に関する国際委員会（仮称）を設立し、この下に開催国を中心とする現地実行委員会を設立して運営にあたるというメカニズムを日本が提案したことである。打合せの結果、第2回会議は日本の提案どおりに準備を進め、アジア土木技術国際会議に関する国際

委員会（仮称）の設立に関しては日本提案の方向で実行グループを作って詳細プランを作成していくこととなった。

今後、アジア圏においてわが国の建設産業のプレゼンスを示す場として、土木学会がリーダーシップを発揮してアジア土木技術国際会議に貢献していくことが求められている。アジア発の技術情報を発信していくという明確な意志がなければ、土木学会の国際貢献の道は開けないと考えられる。

## 国際関係を重視している ASCE

今回のボストン大会に参加してみて、ASCEの国際活動に対する関心と配慮がきわめて大きいことを改めて知らされた。新会長や事務局長の挨拶からは、常に世界的規模の視点でものをみていること、そのためには国際的な協定学会とのつながりを重視しようという姿勢が明確に読み取れた。また、国際歓迎レセプション、協定学会との協定延長サイン式、国際ラウンドテーブル会議、国際ディナー等、協力学会の参加者が参加すべき場を多数用意し、そこには必ず現会長、次期会長等の幹部が出席して親交を深める努力をしている。さらに、上述した総会の会場では、冒頭に協力学会の参加者にスポットライトを当て紹介するといった心遣い配慮もみられた。

ひるがえって土木学会の現状をみると、協定学会がわずかに9か国しかなく、協定学会の代表をわが国に招待する機会もないのが実状である。今後、土木学会誌の新企画「海外協定学会のページ」の立ち上げ、国際的な協定学会の増強、海外における土木学会のブランチグループの創設、英文ニュースレターの創刊、英文ホームページの充実、留学生の集う会の創設等、実施可能な方策から実行に移していく必要がある。会員のご支援をお願いして、ボストン大会の報告としたい。

（1998年12月18日受付）

## 編集委員会から皆様へ

学会誌編集委員会「国際」企画グループは、新たに「海外学会・国際会議のページ」というカラムを設けました。川島氏の投稿原稿は、この新企画の最初の記事となります。この記事の最後でも触られていますように、土木学会と協力協定を持つ海外学会からの記事を掲載する「海外協定学会のページ」の準備が進められており、本カラムで順次取り上げていく予定です。また、本記事のように、会員が参加された国際会議で、特に多くの土木学会員に有益であったり興味を引くと思われるものについて、報告記事を編集委員会に投稿していただければ、できるだけ多くご紹介したいと考えています。

「海外学会・国際会議のページ」企画主査